

原動力は桜の樹

大山 早紀子

(元福祉学科教員)

退職された先生からのメッセージを書いてほしい。まなびあいの事務局から連絡をいただき、頭の片隅にあったものの、思いはまとまることなく、気づけば締め切り間近。慌てて、パソコンに向かい、在職した3年間の思い返している。そうすると学生と一緒に学んだこと、笑ったことが走馬灯のごとく思い起こされ、胸が苦しくなってきた。そうしてまた涙がこぼれそうになる。

私は2015年4月立教大学コミュニティ福祉学部に着任した。初めて大学の教員になったのは修了した大学院の通信教育科であった。馴染みの先生たちに囲まれて、馴染みのキャンパスで始まった教員生活は、大学院生の気持ちが抜け切れていない部分があったのも正直なところである。立教大学は初めて私が教員として歩み始めた場所と言っても過言ではない。初年度は戸惑いと不安の中で、手探りで授業を行っていた。こうして始まった私の立教大学での生活の中で、印象に残ったこととその原動力になったことについて触れたい。

印象に残っていることとして、学生とともに学んだ日々である。先に述べたように、私の前職は通信教育科の教員であったため、定期的な授業は立教大学が初めてであった。毎週、授業が終われば学生のコメントに目を通し、習熟度に合わせてレジュメを改訂し、翌週の授業に臨む。特に初年度は自転車操業の毎日であった。翌年も相変わらず手探りの中で自転車操業の日々ではあったものの、学生と一緒に学び、悩み考えていくうちに、自身がソーシャルワーカーとして大切にしたいこと、学生に伝えたいことも整理され、初年度に比べて幾許か広い視野で学生たちとも向き合うことができたように感じている。2017年度には、精神保健福祉領域の当該年度実習生たちと実習での学びを「まなびあい」で発表するという機会にも恵まれた。これは立教大学の中でも一番印象に残っていることである。もっとも口火を切ったのは、教員だったが決まったからにはと、学生が主体で取り組み、まとめ何度も練習を重ねて本番に臨んだ。当日、発表が終わるまで色々とハプニングはあったものの、学生たちで作り上げた発表は一人ひとりの心に強く残り、また自信にもつながる経験になったと感じている。また私自身、学生と一緒に発表をしたのは、初めての試みで、準備の間に学生から辛辣な言葉を浴びることもあった

が、終わった時は自身の学会発表以上に安堵感を覚えたことは鮮明に記憶されている。このように学生と一緒に学び、一緒に悩み、一緒にゆっくり考えていく時間を持ち、向き合うことができたのも、専任教員の先生方や実習教育室の皆様方、その他大勢の方のお力添えがあったからこそである。殊仕事については自分で納得しなとなかなか取り掛からず、締め切り直前に慌てて取り組むことも多々あった。また授業では忘れ物が多く、事務の方や他の先生方にマジックや模造紙、資料など持ってきてもらうことも度々であった。本当にたくさんの方々にお世話になった3年間であった。

その中で、私の大きな力となっていたのは、着任日に、一緒に着任したコミュニティ政策学科の権安理先生と当時の学部長であった浅井春夫先生と7号館前の桜の木の下で撮影した写真である。この写真は在職中、いつも見えるところに置いており、初めて立教大学に着任した時の初心と心地よい緊張を忘れないようにという役割も果たしてくれていた。(もちろん今も大切に机の中に入れている)。残念ながら、在職中にこの桜の木はなくなってしまった。毎年、その桜を見て、気持ち新たに新年度を迎えていたものだが、キャンパス内に幾多ある桜の中から、まさかその桜がなくなる日が在職中に来ると思ひもしなかった。他の先生方に話しても「言われてみればあの桜なくなったかも…」という反応だったことも今となっては懐かしい思い出でもある。

このように学生とともに苦労しながら学び、キャンパス内にささやかな楽しみや喜びを見つけながら過ごした3年間は、私の教員生活の中でも礎になる経験であり、また誇りでもある。この立教大学での経験、学びを母校で後輩たちに伝えていくことが、今の私の使命であると感じている。

最後になるが、決して器用とは言えない私が3年間過ごすことができたのも、皆さま方のお陰であり、その感謝の念は堪えない。今後のコミュニティ福祉学部の教職員の皆さま、学生や現場実習でご指導いただいた皆様のますますの活躍を祈念して、この稿を閉じたい。

